

短歌の部

選評

合歓の会

田中

滋子

市長賞

下井手

古賀ハルミ

生きている事を奇跡と識りし瞬間^{とき}

肺腑をもがく鳥飛び立ちぬ

(評) これほど自己を分析し向き合い、生きる行程を探す作者を素敵だと思う。そして、きちんと短歌に構成できる力量を評価したい。結句の「鳥飛び立ちぬ」が作者の新しい表現であり詠む力になるであろうとひそかに念ずる。

議長賞

荒尾

中山 和

残照の老いを磨いて一歩ずつはるけき道を尋ねゆくなり

(評) 老いを詠んでいるのにこんなに明るく美しく読める力量を評価したい。具体的ではないが下の句の「はるけき道をたずねゆくなり」がすてきです。たずねゆくなりの語句が作品を重く深いものに仕上げていると思います。

教育長賞

牛水

西島ミサ子

蜘蛛の巣にからまる枯れ葉そよ風に

もてあそばれて身震いをする

(評) 枯れ葉が主語である。くもの巣に引つかかっている

枯れ葉が吹く風にふるえている。
それだけの風景である。なのに作者の力量は、それを
映像のように浮かびあがらせている。「身震いをする」
の結句がこの作品をさらに美しい表現として締めてい
ます。

文化協会会長賞

増永

太田 清美

モノクロの手足動かす画像には希望もたらず胎児が映る

(評) 感情を抑えた初旬のモノクロという言葉に圧倒され
ました。画像に映るのはお孫さんでしょう。が、この
作歌法に驚かされました。「胎児が映る」という結句も
新鮮です。

熊本日日新聞社賞

一部

松井 和子

艶やかに舞いくれし蝶よ足とめて

息ととのえぬ梅雨の晴れの日

(評) うつくしい景ですね。大きな揚羽蝶でしょうか。
舞いくれし蝶と作者の出会いの時の間が梅雨の晴れの
日。設定がとてもいいし、美しい景を詠みとつていま
す。作者の「息ととのえぬ」という動作も加えられて
絵を見ているような感動を覚えました。

秀作

川登

川上登喜子

マスクの人に四分の笑顔で道訊かれ

六分の顔して指さす夕日

(評) おもしろい発想の歌ですね。マスクだらけの世の中です。四分の笑顔という切り口に六分の顔で切りかえず詠み方になるほどこんな作り方もあるのだと、感心しました。結句の「指さす夕日」で風景と時間が設定され、すてきな歌になりました。

秀作

川登

長曾我部明照

ひい孫が近くに寄りて耳もとでもっともっと長く生きてと

秀作

平山

坂本 裕子

田起こしのトラクターの後につき虫つえばむか亜麻鷺群れる

佳作

宇城市

藤木キヌエ

帰り来て松の芽つみに精を出す次男の背なに夫をしのぶ

佳作

一部

山口 勝枝

廃車する されど手作りホルダーを鍵にほどこし愛車見送る

佳作

万田

坂田 峯子

カーブスで青春三度八十年代こころ弾めり鍛えし体に

佳作

西原

西嶋 英子

我が家のみ夜露はさけて通るのか

午前三時も暑気まだ続く

選者詠

合歓の会

田中 滋子

ウクライナのさまよえる民の映像に

あの引揚げのわれをかさねつ

選考を終えて

令和四年度の文芸展短歌の部は、二十二首の作品が揃いました。出詠者数は、十二名でした。ありがとうございます。ございました。今年は、小中学生の出詠はありませんでしたが、レベルの高い作品に出会えたことは嬉しいかぎりです。

秀作・佳作の詠草も手応えのある作品でした。コロナの影響は、かなり深刻で私たちの心をさわがせ閉塞させました。少し明るみはじめた世にむかって心の雄叫びをあげようではありませんか。

来年もお待ちしています。

川柳の部

選評 松村華菜

課題 「秋」

市長賞

増永

横尾 節子

赤とんぼ稲穂ゆらして一体み

(評) 気負いのない言葉で、素直に秋を眺め、今、一面に稲穂が揺れている様子が見える。平和なこの景色こそが郷上の基盤なんだろう。

議長賞

増永

太田 清美

焼き茄子と秋刀魚分け合う秋の膳

(評) 焼き茄子に秋刀魚、まさに秋たけなわ、でも今年は秋刀魚は不漁で高騰し、今迄のように毎日食べられない。「分け合う」に作者の地に足の付いた生活感が匂う。

教育長賞

荒尾

中山 和

秋風に人恋しさの白芙蓉

(評) 開放的だった夏が過ぎ、秋風が吹き始めると、人は心なしか感傷的になり、人恋しくなる。下5の「白芙蓉」は作者自身であり、秋風の下でしっかりと佇む女性の姿が滲む。

文化協会会長賞

長洲町

濱北 葵

晩秋の海に魂溶けてゆく

(評) 晩秋の海の夕焼けは、言葉を失くす程美しい。朝日に光る海、夕陽の落ちる海、海は人を詩人にしてしまう。「魂溶けゆく」の表現に作者の感動が伝わってくる。

熊本日日新聞社賞 荒尾

中村 千鶴

佗びしさを連れてささやく秋の風

(評) 世の中は辛い事や、思い通りにならない事が多い。

でも秋、冬の後には春が来る。

春風は楽しみを運ぶ事だろう。

秀作 1

緑ヶ丘

松尾 末子

秋便り新米届き塩むすび

秀作 2

増永

前川久美子

輪唱の声が聞こえる秋の歌

秀作 3

野原

谷口英絵也

秋晴に案山子労るコンバイン

佳作 1

原万田

高尾 乙女

秋風が吹いて物価が高騰す

佳作 2

宮内出目

前川

幸子

通学路子等の背を押す秋桜

佳作 3

中央区

松田

司

秋空やコロナに勝って祝いたい

佳作 4

四ツ山町

岩山

光義

帰っても一人ですよと秋の杖

佳作 5

荒尾

田中

悦好

紅葉狩り秋の味覚を満喫す

選者吟

シャンソンの枯葉が沁みる風も秋

肥後狂句の部

選評 吉本 五男

笠 「乞うご期待」 「一目散」

市長賞

中央区

松田 司

乞うご期待 世界平和を目指したい

(評) ウクライナ情勢、新型コロナウイルス、それに
加え円安における物価上昇などさまざまな時世、
いつの日か平和を望むばかりです。

議長賞

野原

谷口英絵也

一目散 初100点のランドセル

(評) 真新しいランドセルの中には、初めての
100点のテストが踊っている。早く早くママの
おうちにまっしぐら。

教育長賞

宮内

西川としお

乞うご期待 育児教室通うパパ

(評) 近年、育児に勤しむ夫が多くなり、家事も夫婦
分担のきざしが見えてきています。
これが円満の一因になれば幸いです。

文化協会会長賞

本井手

黒木 秀哉

一目散 夢に向かつて突つ走れ

(評) 幼いころからサッカーや野球に一心不乱に励み
プロを目指す夢は膨らみます。

熊本日日新聞社賞

平山

山川 静子

一目散 孫に負けじと息弾む

(評) まだまだ孫には負けんぞ、昔はもっと強かつ
たはず、ああ、孫も遅しく育ったものだ。

秀作

菰屋

岡村 幸子

乞うご期待 たいぎや勉強しましたよ

秀作

増永

前川久美子

一目散 ゴールテープは目の前に

佳作

増永

横尾 節子

乞うご期待 自伝小説書いてます

佳作

大牟田市

海野 静代

一目散 跣で逃げ出す火の中を

佳作

上井手

小嶋

信恵

乞うご期待

胸におさめてぺんをとる

佳作

増永

松嶋

悦子

乞うご期待

料理教室かよいだし

佳作

下井手

檜原亜由美

一日散

恐竜展で逃げる孫

選者吟

吉本

五男

一日散

トイレ目がけるバスツアー

投句六十四句

一一十二名

俳句の部

選評

大川内 みのもる

市長賞

東屋形

二村 和子

長靴と軍手離さず生身魂（いきみたま）

（評）生身魂とは盆の内、父母や年長者の長命を祈り
持て成された人の事。若い頃からの勤勉さが、
今も自然に体を動かすのである。

議長賞

桜山町

橋本 和子

二千年の杉をいだける涼気かな

（評）神木と仰がれる老杉の涼やかな立ち姿。

教育長賞

樺

荒木 優子

稲の花亡夫に似て来し子の声音

（評）亡き夫に似てきた息子の声。

何よりの頼もしさを思う。

季語が力を添える

文化協会会長賞

一部

西村 安子

潮騒は地球のリズム 颯雲

(評) 潮の干満は昼夜二回。

正に地球の鼓動であり、

天地呼応の構図が大きい。

熊本日日新聞社賞

川登

坂口三千代

卓袱台に開ぐ歳時記秋灯

(評) 机でなく卓袱台が暮らしの一端を窺わせ、
思索に耽る豊かな時間を迎える。

秀作

平山

坂本 裕子

月下美人今夜咲かむと首もたげ

秀作

菰屋

園田 夕子

青葉木菟大樹の蔽 (おほ) ふ地藏堂

秀作

本井手

豊島キクエ

波うてる薄の中に子らの声

佳作

東屋形

白浜 ゆき

庭花のささやく夜の秋簾

佳作

川登

田頭 紀子

蟲の声に沈む立坑誰を待つ

佳作

原万田

野口 汐子

六地藏囲む白粉花の家

佳作

菰屋

園田 則幸

海の日や波にも慣れてはしやぐ兎に

佳作

増永

坂田 靖志

満月やいざなうように山の道

選者吟

この家の金木犀の香を盗む

堺 博之

竜笛に雲払はるゝ今日の月

大川内みのる

戦争の貌が見えくる十三夜

徳山 直子

片付けて夕べ明るき菫の花

荒尾かのこ

少年少女俳句の部

選評

荒尾かのこ

ゴールド賞

海陽中三年

栗山 奈緒

友達と門限までを浴衣着て

(評) 浴衣を着て、

ちよつと大人びてわくわく、
門限いっぱいをしつかり楽しみましたね。

ゴールド賞

中央小四年

奥村 悠大

ねむれない家族旅行の夏の夜

(評) どこまでおでかけしたのかな、

今日のこと、
胸がわくわく、
ねむれませんね。

ゴールド賞

富士見台小五年

西園 碧

アキアカネ田んぼの中を泳いでる

(評) 田んぼの上をすいすい飛んでる赤とんぼ、

まるで「泳いでる」と感じたことが、

独特(どくとく)で、素晴(すば)らしいです。

ゴールド賞

荒尾第二中一年

石橋

惇晃

朝どりを水に浮べる夏野菜

(評) とれたての野菜をすぐ水につけて、

新鮮なうちにいただく、

ご家族との会話や笑顔が見えるようです。

ゴールド賞

府本小六年

荒尾

快晴

きゅつきゅつとワイパーがんばる夏の雨

(評) ザーザー降りの夏の雨、ワイパーが

負けない様に働いています。

「僕も頑張るぞ」と心の中で叫んでいます。

シルバー賞

平井小四年

尾本

結奏

大空を打ち上げ花火せまくする

シルバー賞

中央小四年

田上

伊織

まん丸で少し赤くて夏の月

シルバー賞

中央小六年

小宮

優芽

月赤し空手帰りの風受けて

シルバー賞

中央小三年

野田

璃乃

のきしたでパレードしてゐるつきがき

シルバー賞 平井小二年 石橋 洸季
もう暑日に終り見えない宿題は

シルバー賞 平井小五年 庄山 瑠那
おはようと大好きな声夏の空

シルバー賞 長洲中一年 荒尾 恵恋
おとなりの風鈴がなる心地良く

シルバー賞 富士見台小三年 西園 音色
あそ山のあざみのとげが足をさす

シルバー賞 平井小三年 石橋理香子
遠くから聞こえてくるよほととぎす

シルバー賞 荒尾第一小一年 小幡 美陽
よるのへやむしがぶんぶんやってくる

シルバー賞の皆さんの俳句も
見たことを、聞いたことを、感じたことを、
すなおに自分のことばで表現してあり、
読んだ人の心にひびきます。
又、来年も投句を待っています。